

曼陀羅の人

上



陳舜臣



曼陀羅

永

上

人
陳舜臣

求
法
伝

曼陀羅の人——空海求法伝(上)

一九八四年一月三〇日——初 版

一九八四年四月二〇日——初版第八刷

著者——陳舜臣

発行者——吉田 稔

発行所——株式会社ティビーエス・ブリタニカ

東京都千代田区三番町二八一 秀和三番町ビル 郵便番号一〇二

電話・販売——(〇三)二三八一五七二一

顧客サービス——(〇三)二三八一五七一

振替・東京——一三一三三四

印刷——精興社

新藤美術印刷

製本——大口製本印刷

©Chin Shun Shin, 1984

0093-200187-4968 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

曼陀羅の空
海求
法伝
人

上



● 目次

赤岩松柏観
せきがんしょうはくかん

7

観察使

34

羅漢の泉
らかん

65

断章

93

星発星宿
せいはいつせいしゆく

103

虹の夜
にじ

123

無尽願
むじんがん

156



過ぎ行く年

182

貞元二十一年正月

215

送別

232

毫筆工房
ごうひつこうぼう

268

栄辱の日々

289

浄罪世界

327

清真堂

351

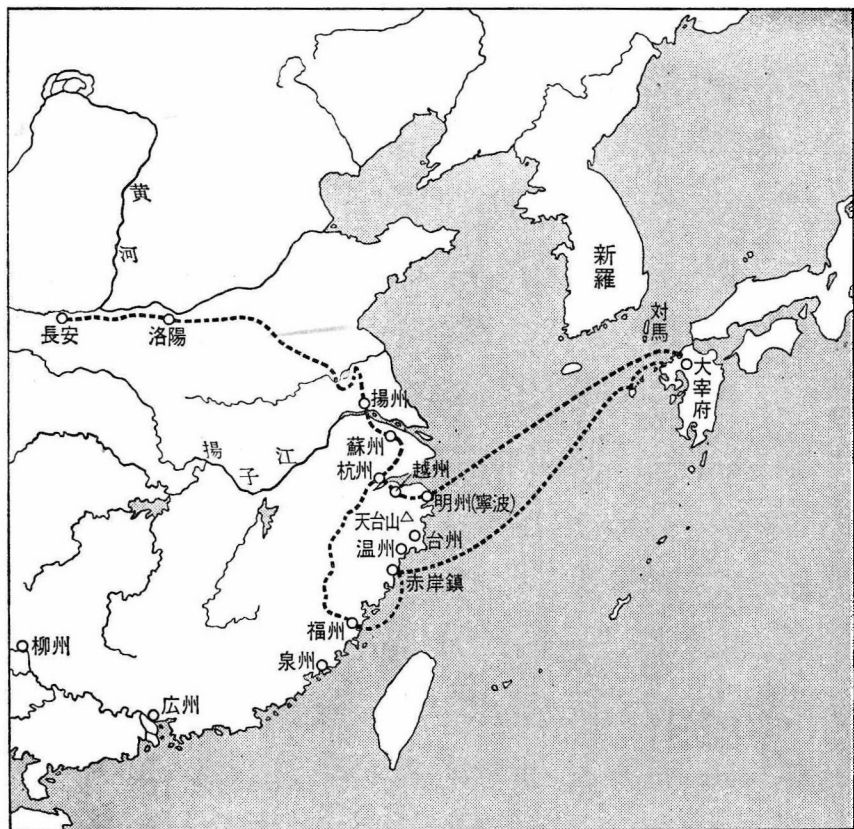
燃える人

376

装丁——勝井三雄

写真——石元泰博

編集協力——財日本教育社



空海入唐主要航行經路

赤岩松柏観
せきがんしょうはくかん

その入江は六印港と呼ばれている。

六つの小島が印材を立てならべたように、海面にうかんでいて、高みから見おろせば、地名の由来は一目瞭然であった。

巨石、波間に屹立し、舟は多く覆溺す。

と、地誌にしろされている福建北部の海岸で、浙江との境界に近い。現在の地図では、ここは福寧湾となっている。

岸辺から、背後にそそり立つ、赤味があった岩山を仰げば、かたわらを流れる河が赤岸溪と名づけられた理由は、説明されないでもわかるだろう。

その岩山は、無造作に赤岩と呼ばれている。岩山といっても、ふところにはいれば、松や杉のちょっとした木立があり、そのなかに小さな道観——道教の寺院があった。

久しく無住で荒れはてていて、門額にしろされた

——松柏観

の三文字が辛うじて読みとれるほどだった。

杜知遠とちえんという道士が、誰だれにことわりもなく、そこに住みついたのは、ついこのあいだのことである。

数日前、見なれぬ船が、まるであえぐように入江にはいり、湾岸の漁民たちを驚かせた。暗礁が多く、水路をよく知っている近在の漁民の小舟のほか、この入江にはいろいろとする船はなかったからである。

「日本の使船が漂着したのだな」

杜知遠は赤岩から、小手をかざして入江をながめ、そうひとりごちた。

船はかなり大きい。明州、揚州、蘇州など、日本の遣唐船がよく通る土地に住んだことがあるので、彼はひと目でそれがわかったのだ。

「あれこれと面倒なことがおこるだろうが、ま、わしとは関係のないことだ」

杜知遠は呟つぶやきながら、また松柏観に戻った。

俗塵ぞくじんからはなれることが、彼の念願だったのである。長い流浪の生活がつづいたが、三十五のとき、親から譲られた財産をつかいはたし、流浪さえでなくなった。そこで、やむをえず俗界とつながる仕事にたずさわっている。

ここへ来たのも、半ば仕事のためだった。だが、日本の遣唐使が漂着したことは、彼の仕事とはあまりかかわり合いがなさそうである。

（仕事とは関係ないが。……はたして、かわり合わずにすむかな？）

面倒なこと、と彼が予想したのは、それが日本の使節をのせた船らしいからだ。彼らはとうぜん、土地の公式の機関と接触しようとするだろう。だが、この土地には、そんなことに応待できるような役人はいそうもなかった。

だいいち、ことばが通じない。

正式の使節だから、通訳は同乗しているはずである。だが、日本から来た通訳が、このあたりの方言を理解できるとは考えられない。

浙江の温州から福建にかけての海岸地方は、中国でも最も訛なまうの差のはげしいことで知られている。隣りの入江へ行けば、もう訛が大きくちがうのだ。数十キロはなれると、意思が通じなくなる。ことさえある。

日本の使節の通訳は、筆談に頼ろうとするにちがいないが、このあたりには文字のわかる人間がほとんどいない。

（赤岸鎮あかしの鎮将でもだめだろうな。自分の名前を書くのが精一杯だから）

床ゆかのうえにごろりと寝ころび、杜知遠は松柏観のくろずんだ天井を見上げながら、そう考えた。唐は国防の要地に守備隊を置き、その駐屯地を鎮と称した。このあたりは、海盜が出没するので、赤岸鎮が置かれている。

おなじ鎮でも上中下の別があり、守備兵三百以下は下鎮とされていた。赤岸鎮は下鎮であり、

守備兵も隊長も、現地の人もあってあてられたのである。隊長は鎮将というが、たいてい土地の有力者で、腕っ節の強い人間、あるいは俠客きやうかくの親分が任命された。

赤岸鎮の鎮将も、網元あみもとの用心棒あがりで、あまり学問はなく、筆談は無理だったのである。

「けっきょく、わしがかかり出されることになるか。……しようがないな」

杜知遠はそう呟つぶやき、そんなことを考えている自分に、むしろに腹が立った。俗塵からはなれようとしながら、俗界のことばかり思いわずらっているのだ。

そのとき、彼はふと、陸功造りくこうぞうのことを思い出して、

「あっ。……」

と、声をもらした。

鎮将の食客に陸功造という老人がいた。めったに口をひらかないので、その存在は忘れられがちである。年をきいても、にやりと笑うだけで、ひとことも答えない。

なぜ鎮にいるかといえば、県や州との連絡の文書を作成するためである。鎮将がどこでこの老人を拾ったか、杜知遠は知らない。おそらく七十になっているだろうが、小柄でしかも瘦やせていて、「拾う」という表現がぴったりであった。

文章を書く人間が鎮にいて、杜知遠がそれを忘れていたのは、その老人がそれほど目立たないからだった。

陸老人に目立つところがあるとすれば、鼻がとがって、しかも大きいということぐらいであろ

う。その老人が背をまるめて、細い腕をうごかして、

——請う、県へ行かれよ。

と書いてある情景を、杜知遠は想像することができた。

六印港に着いた日本船は、桓武天皇の延暦二十三年（八〇四）七月六日、九州肥前国の田浦の港を出帆した、四隻の遣唐使船団の第一船であった。

藤原葛野麻呂が遣唐大使に任命され、節刀を授けられたのは、その前年のことである。

節刀は天皇から全権を委任されたしるしであった。命令に従わぬ者は、その刀で斬ってよろしい、ということなのだ。けれども、このとし、遣唐使船は暴風に遭って引き返し、葛野麻呂はいったん授けられた節刀を奉還した。

一年後、再び遣唐使が派遣されることになった。

第一船には大使の藤原葛野麻呂、副使の石川道益のほか、空海や橘逸勢など留学生を含めて約百二十人が乗った。

第二船には遣唐使判官の菅原清公が乗っていたが、最澄も還学生としてこの船にいたのである。三十一歳の空海は、当時、まったく無名の僧であったが、三十八歳の最澄は、内供奉禪師として、桓武天皇の帰依を受けていた高名の僧だったのである。

留学生は長期にわたって唐に滞在し、研修する学生で、期間は原則として二十年であった。これにたいして、還学生は短期視察のために派遣される。後者はあるていどの地位についている者

であったのはいうまでもない。

陰曆七月といえ、日本から中国へ行くには、季節風に逆らうことになる。大陸と大洋の温度差に起因するモンスーンの知識など、この時代には知られていなかったようだ。

この年ばかりか、まえの年の失敗した航海も、夏季に出発している。

出発の時期は、宮廷の陰陽師おんやうしが占う吉凶によって定められたのである。

田浦の港を出た船団は、翌日、早くも暴風にあい、松明たいちによる連絡は、第一船と第二船だけで、あとは応答がなかった。

その第一船と第二船も、やがて波浪のなかで、はぐれてしまった。

星のない夜は、針路を定めかねる。出発の時期を定めたのとおなじように、船の進む方角も、陰陽師の占いによって定められた。

本来ならば、ほぼ西に進み、揚子江の河口近辺にたどりつき、江をさかのぼり、揚州から運河の便で北上することになる。

大使の乗った第一船は、航路を誤ったか、あるいは風や波に押し流されたか、予定よりだいぶ南の海面を漂っていた。

鳥影を認め、入江をえらんで六印港にはいったが、船の人たちは誰一人、そこがどこであるか知らなかった。暗礁で船体をこわさなかっただけでも、しあわせとしなければならぬ。

遣唐使第一船が、六印港にはいったのは、八月十日のことであった。

太陽曆になおすと、八月十四日に田浦の港を出て、九月十七日に六印港にたどり着いたのだから、海上にあること三十五日だったということになる。

そのうち、暴風にあったのは数日で、大部分は方角を失って漂流していたのだ。帆は損傷を受けていたが、自力で修理できるていどのものだった。舵もどうやらまだ使える状態だったのである。

何人かの漁民があらわれたが、遣唐使の訳語（通訳）は、彼らのことばが、ひとこともわからなかった。

岸と船とのあいだのどなり合いだが、意思が通じないので、どちらも疲れてしまった。

「海盜のたぐいではなさそうじゃな」

大使の葛野麻呂は、岸に立っている人たちが淳朴じゅんぽくそうなのを見て、ひとまず安心したようである。

「まだ上陸しないほうがよろしいございます」

と、副使の石川道益は言った。

上陸は、すなわち入国で、これは重要なことなのだ。唐の官人たちが、手続をやかましく言うことを、道益はかねてきいていたのである。

せつかく、ここまで来たのだ。問題を起こしてはならない。――

遣唐使一行は慎重であった。

暴風をまじえての三十余日の海上生活に、船中の人たちは疲労困憊こんぱいしていた。海になれた水夫も含めて、誰もが一刻も早く土を踏みたかった。

「まだまだ……」

と、道益は彼らを抑えた。

空海はへ、さきに立って、赤い岩山にじっと目をそそいでいた。

橘逸勢がそばに寄って、

「やっと着いたな。ここはどこか知らぬが、唐土にまちがいはあるまい。おぬし、唐語がわかるそうだが、あの連中、なにを申しておるのか、ききとれるかな？」

と、話しかけた。

「ほぼききとれる」

空海は岩山から目をうつさずに答えた。

「ほう。……訳語の者にいわせると、ひどい訛があつて、さっぱり通じないそうじゃが。……で、いったい、彼らはなにを申しておるのだ？」

「まもなく役人が来るから、それまで待て、と申しておる」

「訳語よりも唐語ができるではないか」

「いや、ことはわからぬが、彼らの表情、身のこなし、身ぶり、そうであらうと、ききとっておるのだ」